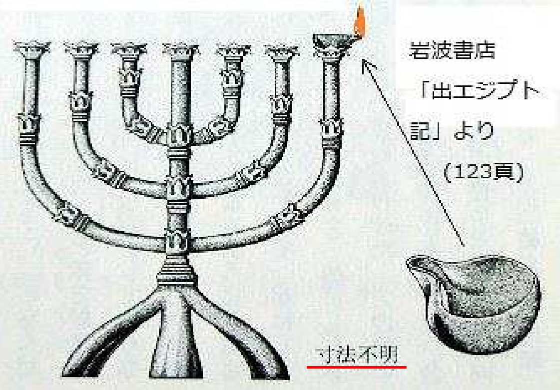
燭　台　メノラー（מְנֹרָה mənôrāh, menuroh, menorah）

燭台（→メノラー）には７（完全数）本の柱（七枝：主柱、６支柱）があり、その上に小さな素焼きのともし火皿（→聖書には、「素焼きのともし火皿」の記述はない）を置く。燭台の光は神の栄光を象徴し、絶えず灯された。アロンとその子らはともし火が夜の間消えないように守った。→出エジプト27：20～21
燭台はアーモンド（バラ科サクラ属・落葉高木）の木の葉と花をデザインしたもので飾られた。
アーモンドの花はカナンの地で春一番に咲く花である。
燭台に使われる油は、オリーブ（モクセイ科・常緑高木）の実をすりこ木でつぶし、布製の籠でこした純粋なオリーブ油が使われた。また、純粋なオリーブ油は燃やしてもほとんど煙は出なかった。

聖書にある燭台についての記述（主な聖句等）	関連聖句
純金で燭台を作りなさい。燭台（→英語版「ランプ台」がより正確）は打ち出し作り（→ミクシャー）とし、台座と支柱、萼（がく）と節と花弁は一体でなければならない。	出エジプト記 25:31
一本の支柱には三つのアーモンドの花の形をした萼と節と花弁を付け、もう一本の支柱にも三つのアーモンドの花の形をした萼と節と花弁を付ける。このように六本の支柱を同じように作る。燭台の主柱には四つのアーモンドの花の形をした萼と節と花弁を付ける。	出エジプト記 25:33～34
節は、支柱が対になって出ている所に一つ、その次に支柱が対になって出ている所に一つ、またその次に支柱が対になって出ている所に一つと、燭台の主柱から出ている六本の支柱の付け根の所に作る。	出エジプト記 25:35
これらの節と支柱は主柱と一体でなければならず、燭台全体は一枚の純金の打ち出し作りとする。	出エジプト記 25:36
燭台とこれらすべての祭具とを重さ一キカル（≒34.2kg）の純金で作る。 →参考：金Au：4,700円/g×34.2kg≒1億6100万円→評価額：３億円（The Path to Throne of God）	出エジプト記 25:39
垂れ幕の手前には机を置き、向かい合わせに燭台を置く（→LB：幕の外の聖所に、テーブルと燭台を向かい合わせに置く）。燭台は幕屋の南側に、机は北側に置く。	出エジプト記 26:35
アロンは主の御前に絶やすことなく火をともすために、純金の燭台の上にともし火皿を備え付ける。→夕方に油を補給、朝に燭台の下に置かれている火ばしと芯切り鋏で燭台のともし火を整える。	レビ記24:04 出エジプト記 30:07～08
燭台の付属品として、七個のともし火皿、芯切り鋏、火皿を純金で作った。	出エジプト記 37:23
主はモーセに仰せになった。アロンに告げてこう言いなさい。あなたがともし火皿を載せるとき、七つのともし火皿が燭台の前方（→西側）を照らすようにしなさい。アロンは、主がモーセに命じられたように、燭台の前方を照らすようにともし火皿を載せた。	民数記 8:01～03
内陣（→至聖所）の前（→聖所）に左右に五つずつ置かれる純金の燭台、金の花、ともし火皿、火ばし、純金の皿、芯切り鋏、鉢、柄杓（ひしゃく）、火皿、（←ソロモン神殿） →すべて純金製。火ばしと芯切り鋏は火を整える、鉢は動物の献げ物を準備するためのもの、火皿は香をたく、炭火を運ぶ、献げ物をささげた後の灰の掃除に使われた。	列王記上 07:49～50a
彼ら（→主に使える祭司＝アロンの子孫とレビ人：13：10）は朝ごと夕ごとに主に焼き尽くす献げ物を燃やして煙にし、香草の香をたき、純金の聖卓にパンを供え、夕ごとに金の燭台とそのともし火皿に火をともす。	歴代誌下 13:11a
第五の幻（ゼカリヤ書４章）→わたしは言葉をついで御使いに尋ねた。「燭台の右と左にある、これら二本のオリーブの木は何ですか。」	ゼカリヤ書 04:11
この二人の証人とは、地上の主の御前に立つ二本のオリーブの木、また二つの燭台である。 →オリーブの木は、ゼカリヤの幻の中のオリーブの木を指す。その幻では、神が神殿と民を新たにするために二人の油注がれた人たちを用いると預言されている。ゼカリヤ書では、指導者ゼルバベルと大祭司ヨシュアを指すが、ここでは教会の指導者たちを指す。	ヨハネの黙示録 11:04



← メノラー（מְנֹרָה mənôrāh, menuroh, menorah）

Olive fruit

Almond flowers

NO COPY H.Taniguchi